大学生は SNS での対人関係をどのように考え、利用しているか

文化心理学的相互構成過程の視点からの考察

○東海林渉¹・西村洋一²・井口彰子² (非会員)

(¹ 東北大学・² 北陸学院大学)

キーワード: ソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS), 親密化, 相互構成過程

How to think and use of interpersonal relationships on SNS among Japanese college students

Wataru SHOJI¹, Youichi NISHIMURA² and Akiko IGUCHI^{3,*}

(¹ Tohoku University, ² Hokuriku Gakuin University)

Key Words: social networking service, close relationship process, mutual constitution process

目 的

ソーシャル・ネットワーキング・サービス (以下, SNS) は, 若者を中心に, インターネット上で積極的に利用されているサービスの一つである。SNS は社会的つながりの維持や構築を支えるためのサービスであり, SNS 利用が現代青年の友人関係の親密化に与えている影響は大きいと思われる。

青年期の友人関係の特徴について, これまで希薄化 (対立や葛藤を避け表面上円滑であろうとする) や, 選択化 (場面や遊ぶ内容によって友人を使い分ける) など, いくつかの論説が提唱されている。そうした特徴は時代とともに自然に変化するというよりは, 青年が直面している社会情勢 (家族形態の変容, 携帯電話の出現など) に影響を受けながら生じているものであろう。一方で, 青年が SNS をどう使うかが社会情勢 (この場合は SNS の利用拡大など) に影響を与える側面もあるだろう。従って, それらの論説の妥当性を検証するには, 現代青年が置かれている社会情勢を考慮し, 文化と心の相互構成過程 (北山, 1997) を踏まえる必要がある。

そこで本研究では, SNS を積極的に利用している年代である大学生を対象に, 対人関係の構築に SNS をどのように利用しているかについて調査を行い, 相互構成過程の視点から現代青年の友人関係の親密化について検討することを目的とする。

方 法

対象者 X 大学に在学する 1~4 年生の大学生 17 名 (男性 9 名, 女性 8 名)。平均年齢は 19.8 歳。SNS の利用状況は, 17 名全員が LINE を利用しており, 全員が毎日利用していた。Twitter の利用は 17 名中 13 名であり, 12 名が毎日利用をしており, 1 名は週 3~4 日の利用であった。Facebook は 17 名中 9 名が利用しており, 毎日利用している者は 2 名, それ以外は週 1~3 日の利用であった。その他に利用のあった SNS は Kakao Talk, Instagram, mixi, Between であった。

調査項目 (1) 友人関係の構築や維持に SNS をどのように活用しているか, また活用していないとすればその理由は何か, (2) SNS をどのように捉えているか (メリットとデメリット)

について, 半構造化面接により聞き取りを行った。

調査手続き 面接は 2014 年 7 月に, 3 人の面接者が個別に実施した。面接の平均所要時間は 42 分であった。

分析 回答を逐語化し, 文脈の意味が損なわれない程度に逐語を切片化したうえで, KJ 法を用いて分析した。

結 果

友人関係の構築と維持に SNS をどのように利用しているかについてカテゴリー間の関係を検討した。図 1 は, 友人関係の深化において直接的なやり取りを重視する通俗的な価値観に基づいて結果を捉えたものであり, 図 2 は関係の深化をより柔軟に捉えた場合の概念図である。図 3 には, SNS での人付き合いに関する捉え方についての概念図を示した。

考 察

青年の SNS 利用が拡大している現状を踏まえると, SNS でのつながりに肯定的である図 2 の捉え方が図 1 よりも適している。図 2 に示すように, 現代青年は直接的なやり取りに「関係の深まり」を見出す従来の価値観を持ちながら, ネットを介した間接的なやり取りによる交流も意義深いものとして認めており, その寛容さが特徴的であった。これは選択化の考えを支持する結果であろう。現代青年は SNS を利用しなければ友人関係を維持しづらい社会情勢の中で, 時に煩わしさや難しさを感じながらも, これまでになかった新たな友人関係のあり方や価値観を創出し, SNS 利用の文化に適応している。そのため図 3 に示すように, SNS を通じて交友関係を広げることによって肯定的な一方, 良否の両側面を認識し, リスクを最小にするために当人の責任と的確な利用が求められるという意識を保持していた。

現代青年の対人関係のあり方は従来の文化的価値観に沿いながらも, 電子機器の発達によるコミュニケーション方法の変化に適応していこうとするプロセスと考えられる。これらは電子機器を対人関係の親密化に積極的に活用し, 新たな文化的価値を生み出す流れでもあり, 文化心理学的な双方向プロセスと考えることができるだろう。